

「中高生の英語学習に関する実態調査2014」から見えてくるもの(2)
——中学生と高校生の英語に対する好意——

Findings from the Survey on the English Studies of Japanese
Lower and Upper Secondary School Students 2014 (2):
Lower and Upper Secondary School Students' Liking for English

酒井英樹

Hideki SAKAI

信州大学

Shinshu University

Abstract

The purpose of this paper is to report my findings, based on data from the Survey on the English Studies of Japanese Lower and Upper Secondary School Students 2014, about lower and upper secondary school students' liking for English. First, from the responses to six items (e.g., How much do you like listening to English?), I calculated the factor scores as to students' liking for English. The results of ANOVAs indicated that for public school, students in Grades 7 and 8 showed high degrees of liking for English as compared to students in Grades 10 and 11. However, for private school students, the degree of liking for English in Grade 10 was not low. Second, multiple regression analyses on the responses from Grade 7 students were carried out to identify factors which influenced students' liking for English. For public school students, several factors related to (a) exposure to English and studying English outside the school, and (b) lower secondary school lessons (i.e., the degree of Japanese teachers' use of English in class, the frequencies of the activities in which students were required to express their feelings or opinions) showed statistical significance as predictive variables. In contrast, for private school students, only exposure to English outside the school was found to be significant.

Keywords

Liking for English, Students' English Studies, Grade Differences

1. はじめに

日本人を対象にして時間的経過による動機の変容とその要因を調べた研究として、Hayashi(2005), Sawyer(2007), Miura(2010), 酒井(2011)がある。例えば、酒井(2011)は、大学生を対象に、英語を学習する意欲の強さを振り返らせた結果、中学3年生から高校1年生にかけて動機の減衰が見られたことと、高校3年生に動機の高揚が見られ

たことを報告している。また、これらの研究では、自由記述などにより動機づけの変容要因を調べようとしている。

これらの先行研究の対象人数は120人(Sawyer, 2007)から481人(Hayashi, 2005)と比較的少ない。さらに、動機づけの変容要因を質的に分析しているため、統計的に分析したものはない。そこで、本研究は、「中高生の英語学習に関する実態調査2014」(ベネッセ教育総合研究所, 2014)で得られたデータを再分析し、このギャップを埋めようとするものである。調査の項目の中に、動機づけの強さに関する質問項目がなかったため、内発的動機づけの1つと考えられる英語に対する好意を取り上げた。研究課題は、次の2つである。

1. 英語に対する好意は学年ごとにどのような違いが見られるか。
2. 英語に対する好意に影響を及ぼす要因は何か。

2. 方法

2.1 調査方法および調査対象者

ベネッセ教育総合研究所の「中高生の英語学習に関する実態調査2014」は、2014年3月に実施された郵送法による自記式質問紙調査である。

調査依頼は、2つの方法で実施した。第1に、東京大学・社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所の共同研究「子どもの生活と学び」プロジェクトの調査モニター4,021名に質問紙を配布した。モニターの回収率は79.2%であった。また、非モニター14,800名にも質問紙を配布した。回収率は21.0%であった。中学1年生から高校3年生まで計6,294名の有効回答数を得た(中学1年生1,057名、中学2年生1,028名、中学3年生996名、高校1年生931名、高校2年生790名、高校3年生1,433名、学年不明59名)。

分析にあたっては、学校段階別の比較の精度を高めるため、全国の学年別生徒構成比(文部科学省「学校基本調査」参照)及び進研ゼミ会員・非会員比が実際と等しくなるようにウェイトの設定を行った。以下、調査結果は、データにウェイトの設定をして集計したものである。

本研究では、6,294名中、学年不明の者を除いた6,107名を分析対象とした(表1参照)。

表1 各学校種における学年ごとの人数

	中1生	中2生	中3生	高1生	高2生	高3生	合計
公立	859	848	875	640	629	630	4,481
私立	129	146	137	330	317	291	1,350
公立中高一貫校	14	26	24	32	35	21	152
国立	17	23	22	23	16	11	112
その他	0	5	2	1	3	1	12
合計	1,019	1,048	1,060	1,026	1,000	954	6,107

2.2 調査内容

調査全体の内容は、以下の通りである。

- ・ 中学校入学前の英語学習について(幼少期の英語体験・学び、小学校英語・小学校時の学校外学習の役立ち感)
- ・ 現在の英語学習について(授業の理解度、授業における活動内容、教師の授業での英語使用、授業以外の学習時間、学校外学習、習い事、学校の授業の予習・復習)
- ・ 英語学習に対する意識について(英語の好き・嫌い、つまずき、英語の学習観)
- ・ 英語に関する意識や関わりについて(外国や英語との関わり、自主的に英語に触れる活動、英語の必要性、将来の英語使用に関する意識)

具体的な調査票については、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトで公開されている(ベネッセ教育総合研究所, 2014)。

これらの質問項目のうち、本研究では以下の項目に関する回答を分析した。

2.2.1 英語に対する好意

英語に対する好意に関して、以下の6項目を分析した。

(1) 第15問「あなたは次のようなことは好きですか。」の4項目

「英語を聞くこと」、「英語で話すこと」、「英語で文章や本を読むこと」、「英語で書くこと」という4項目が設定されていた。回答は「1 とても好き」、「2 まあ好き」、「3 あまり好きではない」、「4 まったく好きではない」の4件法であった。分析の際に、得点を反転した。

(2) 第16問「英語の学習にかかわることについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。」の1項目

第16問は12項目設定されているが、その中の「英語そのものが嫌い」(No. 9)という1項目を分析した。回答は「1 とてもあてはまる」、「2 まああてはまる」、「3 あまりあてはまらない」、「4 まったくあてはまらない」の4件法であった。

(3) 第23問「あなたは、次の教科の時間がどれくらい好きですか。」の1項目

国語、社会、数学、理科、英語の5つの教科が示されているが、このうち、英語に関する得点を分析対象とした。回答は「1 とても好き」、「2 まあ好き」、「3 あまり好きではない」、「4 まったく好きではない」の4件法であった。分析の際に、得点を反転した。

2.2.2 英語に対する好意に影響を及ぼす要因

Kikuchi(2013)は英語を学習する動機を衰退させる要因として、教師に関する要因、授業の内容/特質、失敗経験、授業環境、授業教材、英語に対する内発的動機の欠如の6つの要因を挙げている。この要因を参考にし、調査項目の中から、本研究では、小学校以前の要因(小学校英語の有無、小学校以前の学校外学習の有無、小学校以前の英語との関わり度)、中学校時の授業に関する要因(日本人の先生の英語使用度、外国人の先生の授業参加頻度、授業：自分の気持ちや考えを英語で書く、授業：自分の気持ちや考えを英語で話す)、現在の学校外学習の要因、現在の英語との関わり度の要因(外国や英語との関わり度、英語に触れる機会度)を選び、分析対象とした。

(1) 小学校以前の要因

小学校英語の有無は、第2問「あなたが小学生のとき、学校で英語の授業や活動はありましたか。」に対する2件法の回答(「1 あった」と「2 なかった」)を分析した。なお、分析のために、「あった」を1点、「なかった」を0点に変換している。

小学校以前の学校外学習の有無は、第3問「あなたは中学校に入学する前(小学生のときやそれ以前)に、学校の授業以外で英語や英会話の勉強をしていましたか。」に対する2件法の回答(「1 していた」と「2 していなかった」)を分析した。なお、分析のために、「していた」を1点、「していなかった」を0点に変換している。

小学校以前の英語との関わり度は、第4問「中学校に入学する前(小学生のときやそれ以前)のあなたと外国や英語とのかかわりについて、次のようなことはあてはまりますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。」という問いに対する7項目の○の数を合計した。7項目は、次の通りである。

1. 家族や親せきから外国の話を聞いたことがある
2. 英語音声の映画やテレビ番組を見たことがある
3. インターネット上の英語のサイトを見たことがある
4. 英語の検定試験を受けたことがある
5. 外国人の友だちがいた
6. 海外旅行やホームステイ(留学なども含む)に行ったことがある
7. 外国に住んでいたことがある

(2) 中学校時の授業に関する要因

日本人の先生の英語使用度は、第10問「英語の授業で、日本人の先生はどれくらい英語を使って授業を進めていますか。」という問いに対する5件法の回答(「1. ほとんど使っていない」、「2. 30%くらい」、「3. 50%くらい」、「4. 70%くらい」、「5. ほとんど英語で授業している」)を分析した。

外国人の先生の授業参加頻度は、第8問「あなたが受けている授業の中で、外国人の先生はどれくらい授業に参加していますか。」という問いに対する8件法の回答(「1. 週2回以上」、「2. 週1回程度」、「3. 月2,3回程度」、「4. 月1回程度」、「5. 2,3ヶ月に1回程度」、「6. 半年に1回程度」、「7. 年に1回程度」、「8. 参加していない」)を分析した。なお、分析にあたっては、反転させた得点を用いた。

授業については、第9問「学校の英語の授業の中で、次のようなことをどれくらいしていますか。」という問いに対する「自分の気持ちや考えを英語で書く」と「自分の気持ちや考えを英語で話す」の2項目の4件法の回答(「1 よくしている」、「2 ときどきしている」、「3 あまりしていない」、「4 まったくしていない」)を分析した。分析には反転させた得点を用いた。

(3) 現在の学校外学習の要因

現在の学校外学習については、第12問「あなたは現在、学校以外の塾や習い事で、次

のような英語の勉強をしていますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。」の「5. していない」に対する回答を分析した。「していない」に○をつけていけば0点、「していない」に○をつけていなければ1点とした。

(4) 現在の英語との関わりの要因

外国や英語との関わり度は、第17問「あなたと外国や英語とのかかわりについて、次のようなことはあてはまりますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。」に対する8項目の○の数を合計した。8項目は、次の通りである。

1. 家族に英語を話せる人がいる
2. 外国に住んでいる(または住んでいたことがある)家族や親せきがいる
3. 英語の検定試験を受けたことがある
4. 外国人の友だちがいる
5. 中学校入学後、海外旅行やホームステイ(留学なども含む)に行ったことがある
6. 中学校入学後、外国に住んでいたことがある
7. 家族に英語の歌を聴く人がいる
8. 家族に英語音声の映画やテレビ番組を観る人がいる

英語に触れる機会度は、第18問「現在、ふだんの生活で、英語に触れることはどれくらいありますか。あてはまる番号に○をつけてください。」に対する7項目の4件法の回答(「1. よくある」、「2. ときどきある」、「3. あまりない」、「4. まったくない」)を分析した。7項目の回答を反転させた上で、合計得点を計算した。

2.3 分析方法

まず、英語に対する好意が学年ごとにどのように異なるかを調べるために、英語に対する好意に関する6項目を取り上げて、因子分析を行った。6項目とも、1つの因子に対する負荷量が高いことが示されたため、1因子解で回帰法による因子得点を計算した。この因子得点に対して、学年ごとの平均値に統計的に有意な違いがあるか検討するために、一要因の分散分析を実施した。有意水準は5%に設定した。さらに、Tukey HSDによる多重比較を実施した。なお、6項目の信頼性係数は、 $\alpha = .906$ であった。

次に、小学校以前の要因、中学校時の授業に関する要因、現在の学校外学習、現在の英語との関わりの点から、英語に対する好意の因子得点を予測するために、強制投入法による重回帰分析を行った。この重回帰分析については、中学1年生のデータを分析対象とした。学習指導要領が完全実施され、外国語活動を小学5年生と6年生時に経験している生徒である。

3. 結果と考察

3.1 英語に対する好意

表2は、英語に対する好意の因子得点の平均値及び標準偏差を学校区分ごとに示した

ものである。公立中高一貫校と国立の各学年の人数が12~32名と少ないため、学年間の違いの分析は、公立学校及び私立学校を対象に実施した。

表2 英語に対する好意(因子得点)の平均値と標準偏差

	中学1年生			中学2年生			中学3年生			高校1年生			高校2年生			高校3年生		
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
公	838	0.11	0.96	797	0.05	0.97	783	0.00	0.96	573	-0.16	0.93	494	-0.15	0.94	931	-0.08	0.94
私	120	0.48	0.88	137	0.23	0.94	121	0.17	0.94	294	0.00	0.96	241	-0.14	0.92	421	-0.08	0.98
一	14	0.35	0.99	24	0.25	0.80	22	0.21	0.79	29	0.34	0.96	26	0.31	0.85	32	0.12	0.94
国	15	0.52	1.08	22	0.36	0.84	18	0.36	1.13	21	0.04	0.95	12	-0.14	0.88	16	0.17	0.84

注：公=公立，私=私立，一=公立中高一貫校，国=国立

3.1.1 公立学校の場合

図1は、学年ごとの英語に対する好意の因子得点の平均値と95%信頼区間を示したものである。中学生の英語に対する好意は、高校生の英語に対する好意よりも比較的高い。また、中学1年生で高かった好意が徐々に下がっていることも示されている。高校3年生の英語に対する好意が若干高くなっているという特徴も見られる。

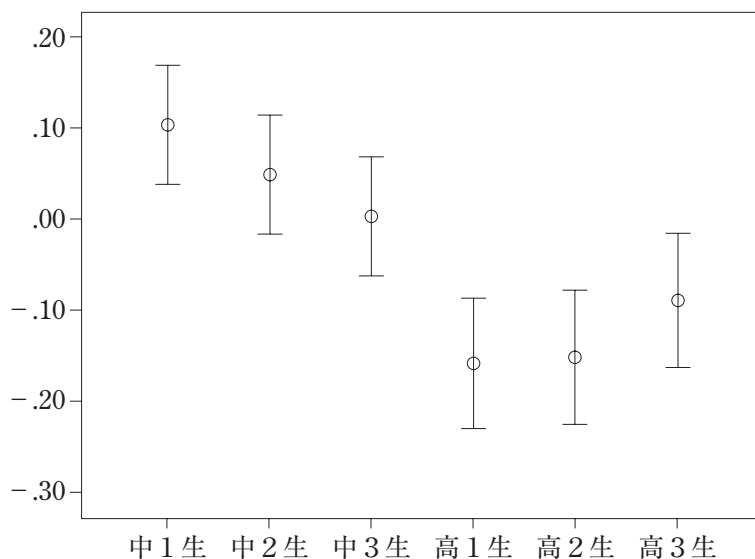


図1 学年ごとの英語に対する好意の因子得点の平均値と95%信頼区間(公立学校)

学年間の違いを統計的に検討するために一要因分散分析を実施した。学年の要因は、 $F(5, 4,410) = 8.962$, $p = .000$, $\eta_p^2 = .010$ で有意であった。Tukey HSDによる多重比較の結果は次の通りであった。

中学1年生 > 中学3年生, 高校1年生, 高校2年生, 高校3年生
 中学2年生 > 高校1年生, 高校2年生, 高校3年生
 中学3年生 < 中学1年生 中学3年生 > 高校1年生, 高校2年生
 高校1年生 < 中学1年生, 中学2年生, 中学3年生
 高校2年生 < 中学1年生, 中学2年生, 中学3年生
 高校3年生 < 中学1年生, 中学2年生

すなわち、公立学校の場合、英語に対する好意は、中学1年生と中学2年生が最も高く、高校1年生と高校2年生が最も低かった。高校の学年間は、統計的に有意な違いは見られなかった。また、中学3年生は、中学1年生より有意に低く、高校1年生や高校2年生と比べて有意に高かったが、中学2年生や高校3年生とは統計的に有意な違いは見られなかった。

3.1.2 私立学校の場合

図2は、学年ごとの英語に対する好意の因子得点の平均値と95%信頼区間を示したものである。公立の中高生に比べて、私立の中高生の英語に対する好意は比較的高い。中学生が高校生に比べて高い好意を示している点は公立も私立も同じであるが、高校1年生の英語に対する好意が他に比べてそれほど低くないという特徴が私立には見られる。

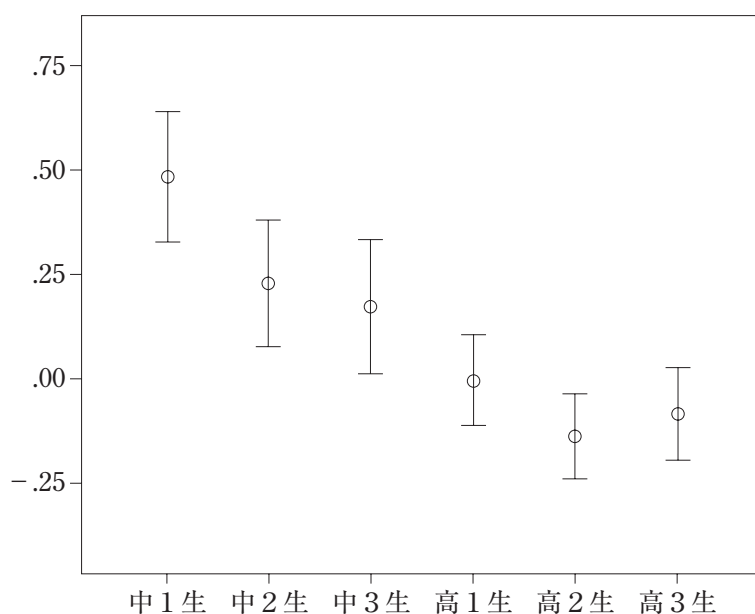


図2 学年ごとの英語に対する好意の因子得点の平均値と95%信頼区間(私立学校)

学年間の違いを統計的に検討するために一要因分散分析を実施した。学年の要因は、 $F(5, 1,328) = 9.906$, $p = .000$, $\eta_p^2 = .036$ で有意であった。Tukey HSDによる多重

比較の結果は次の通りであった。

中学1年生 > 高校1年生, 高校2年生, 高校3年生

中学2年生 > 高校2年生, 高校3年生

中学3年生 > 高校2年生

高校1年生 < 中学1年生

高校2年生 < 中学1年生, 中学2年生, 中学3年生

高校3年生 < 中学1年生, 中学2年生

私立学校の場合、高校1年生における英語に対する好意の因子得点の平均値の落ち込みは見られず、中学1年生より有意に低かっただけであった。中学1年生が最も高く、高校2年生が最も低かったが、中学の各学年間と、高校の各学年間には有意な違いが見られなかった。

3.2 英語に対する好意に影響を及ぼす要因

3.2.1 公立中学1年生の場合

公立の中学1年生について、小学校以前の要因、中学校時の授業に関する要因、現在の学校外学習、現在の英語との関わりの点から、英語に対する好意の因子得点を予測するために、強制投入法による重回帰分析を行った。表3は、各変数の平均値と標準偏差を示している。この中で、小学校英語の有無について、平均値が0.97であり、ほとんどの生徒(すなわち、97%)が経験しているという結果であった。この変数については、以下の重回帰分析の解釈には注意を要する。

表3 各変数の記述統計量(公立・中学1年生)

	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
小学校以前の要因			
小学校英語の有無	859	0.97	0.16
小学校以前の学校外学習の有無	848	0.48	0.50
小学校以前の英語との関わり度	859	1.31	1.20
中学校時の授業に関する要因			
日本人の先生の英語使用度	853	2.89	0.93
外国人の先生の授業参加頻度	848	5.58	1.95
授業：自分の気持ちや考えを英語で書く	855	2.50	0.90
授業：自分の気持ちや考えを英語で話す	858	2.54	0.93
現在の学校外学習の要因			
現在の学校外学習	859	0.51	0.50
現在の英語との関わりの要因			
外国や英語との関わり度	859	1.31	1.33
英語に触れる機会度	841	12.03	3.81
目的変数			
英語に対する好意の因子得点	842	0.10	0.96

重回帰分析の結果、10個の変数が英語に対する好意の因子得点の22.8%を説明していた。表4は、各変数の偏回帰係数、その標準偏差誤差、標準化偏回帰係数、 t 値及び有意確率を示している。統計的に有意であった変数は、「英語に触れる機会度」、「小学校以前の学校外学習の有無」、「現在の学校外学習」、「日本人の先生の英語使用度」、「授業：自分の気持ちや考えを英語で話す」、「授業：自分の気持ちや考えを英語で書く」という6つであった。中でも、「英語に触れる機会度」は、英語に対する好意に強く関係していることが示された。また、中学1年生の段階では、中学校時の授業に関する要因のうち、「日本人の先生の英語使用度」や、授業におけるコミュニケーション活動の経験の頻度が、英語に対する好意に影響を与える点も注目に値する。

小学校以前の要因としては、「小学校英語の有無」は有意でなかったが、先述のように、97%の生徒が経験していると回答しているため、解釈には注意を要する。

表4 英語に対する好意に影響を及ぼす要因(公立・中学1年生)

	B	$SE B$	β	t	p
英語に触れる機会度	.057	.009	.226	6.392	.000
小学校以前の学校外学習の有無	.275	.067	.142	4.101	.000
現在の学校外学習	.200	.065	.103	3.049	.002
日本人の先生の英語使用度	.099	.033	.096	2.975	.003
授業：自分の気持ちや考えを英語で話す	.127	.045	.123	2.804	.005
授業：自分の気持ちや考えを英語で書く	.131	.047	.120	2.763	.006
外国や英語との関わり度	.040	.028	.056	1.428	.154
小学校英語の有無	.208	.189	.035	1.104	.270
外国人の先生の授業参加頻度	.009	.016	.018	.569	.570
小学校以前の英語との関わり度	-.009	.032	-.012	-.294	.769

3.2.2 私立中学1年生の場合

次に、私立の中学1年生について、小学校以前の要因、中学校時の授業に関する要因、現在の学校外学習、現在の英語との関わりの点から、英語に対する好意の因子得点を予測するために、強制投入法による重回帰分析を行った。表5は、各変数の平均値と標準偏差を示している。この中で、小学校英語の有無について、公立と同じように、平均値が0.97と高く、この変数については、以下の重回帰分析の解釈には注意を要する。

表5 各変数の記述統計量(私立・中学1年生)

	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
小学校以前の要因			
小学校英語の有無	129	0.97	0.18
小学校以前の学校外学習の有無	129	0.50	0.50
小学校以前の英語との関わり度	129	1.75	1.58
中学校時の授業に関する要因			
日本人の先生の英語使用度	126	3.09	1.08
外国人の先生の授業参加頻度	129	6.28	2.15
授業：自分の気持ちや考えを英語で書く	125	2.68	0.99
授業：自分の気持ちや考えを英語で話す	125	2.65	1.01
現在の学校外学習の要因			
現在の学校外学習	129	0.48	0.50
現在の英語との関わり度の要因			
外国や英語との関わり度	129	2.11	1.76
英語に触れる機会度	128	13.63	4.85
目的変数			
英語に対する好意の因子得点	123	0.48	0.88

重回帰分析の結果、10個の変数が英語に対する好意の因子得点の30.4%を説明していた。表6は、各変数の偏回帰係数、その標準偏差誤差、標準化偏回帰係数、*t* 値及び有意確率を示している。統計的に有意であった変数は、「英語に触れる機会度」だけであった。公立の中学1年生と異なり、中学校時の授業に関する要因は有意ではなかった。

表6 英語に対する好意に影響を及ぼす要因(私立・中学1年生)

	<i>B</i>	<i>SE B</i>	β	<i>t</i>	<i>p</i>
英語に触れる機会度	.061	.018	.345	3.284	.001
外国や英語との関わり度	.073	.052	.151	1.404	.163
授業：自分の気持ちや考えを英語で話す	.149	.145	.177	1.031	.305
現在の学校外学習	.148	.153	.086	.966	.336
授業：自分の気持ちや考えを英語で書く	.075	.147	.088	.510	.611
小学校以前の学校外学習の有無	.076	.160	.045	.477	.635
日本人の先生の英語使用度	.003	.069	.004	.044	.965
小学校英語の有無	-.105	.441	-.020	-.238	.813
外国人の先生の授業参加頻度	-.015	.033	-.037	-.443	.659
小学校以前の英語との関わり度	-.050	.059	-.094	-.836	.405

4. おわりに

本研究では、英語に対する好意は学年ごとにどのような違いが見られるかという点と、英語に対する好意に影響を及ぼす要因は何かという点から、大規模な調査データを基に統計的に分析を行った。公立と私立で、異なるパターンが見られたことは注目に値する。公立では、授業や教師の要因が内発的動機づけに影響を与える度合いが私立に比べて強いことが示唆される。また、高校1年生の英語に対する好意が、公立では6学年の中で最も低かったのに対して、私立ではそのようなパターンは見られなかった。公立の場合、中高の接続がうまく行っていないことが示唆される。

参考文献

- Hayashi, H. (2005). Identifying different motivational transitions of Japanese ESL learners using cluster analysis: Self-determination perspectives. *JACET Bulletin*, 41, 1-17.
- Kikuchi, K. (2013). Demotivators in Japanese EFL context. In M. Apple., D. Silva & T. Fellner (Eds.), *Language learning motivation in Japan* (pp. 206-224). Bristol: Multilingual Matters.
- Miura, T. (2010). A retrospective survey of L2 learning motivational changes. *JALT Journal*, 32, 29-53.
- Sawyer, M. (2007). Motivation to learn a foreign language: Where does it come from, where does it go? *Gengo-to-Bunka*, 10, 33-42.
- 酒井英樹 2011. 「英語の学習動機—脱動機づけ (demotivation) に焦点をあてて—」『上智大学言語学会会報』第25号, pp.128-133.
- ベネッセ教育総合研究所 2014. 「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」
Available: <http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4356>
[2015年10月]